

2 社会科

上之園強, 佐藤 健, 柏木俊明

1 社会科における自立の必要性

国際化, 情報化, 高齢化, 地球環境の悪化等, 子どもたちを取り巻く社会は急激に変化しており, 今後もさらなる加速化が予測される。子どもたちにとって, これらの社会の変化が自分たちの生活にどんな意味をもたらすのか, 自分との関わりの中で社会を見つめ, 自分自身の生き方に思いを巡らせながら, 自己を確立していく学習が不可欠である。

子どもたち一人ひとりの生活と結びついた学習の充実を図り, 「社会を形成する一員として, 自ら考え判断し, 行動して, 自分たちの生活をより豊かにすることのできる力」を育むことが必要である。子ども一人ひとりが, 学習の仕方を習得しながら, 自分なりの問題意識と見通しをもち, 問題を解決しようとする意欲や態度の育成を重視していきたい。

2 社会科における自立と自己決定

(1) 自立と自己決定との関わり

社会科部では, 自立を, 「社会的事象・事実について, 自分でめあてを決め, それを追究し, その結果を自ら振り返り, 新たなめあてをつくることで, よりよく生きていこうとすること」と捉えた。問題を自ら選択・決定したり, 自らの学習方法を身につけたり, 学習したことを自分なりの方法でまとめたりする力が求められる。これらのことは, 自分で決めること(自己決定力の育成)と深く関わっている。学習のあらゆる場面で自分自身で決定していく力が, 自立の中核であると同時に, 自立へと向かう子どもを育てる契機となるからである。

(2) 社会科学習における自己決定

社会科学習における主な自己決定は, 次の2つが考えられる。

1つ目は, 社会的判断力である。社会科学習のねらいは, 「科学的な社会認識を形成し, 市民的資質を育成する」ことである。特に, 市民的資質の育成という視点からは, 社会の一員として社会をよりよくしていくための合理的意思決定能力やよりよい社会を形成していくために未来社会のあり方を創造し, 発信していく未来志向に関わる自己決定力等の社会的判断力の育成が大切である。

2つ目は, 学習の仕方に関わる自己決定である。学習問題, 学習内容, 学習方法, さらに学習のまとめ方を児童自身が決めることである。例えば, 課題別による複線型の学習や個に応じた表現方法の活用などが考えられよう。

3 めざす子ども像

以上の考えに基づき, めざす子ども像を以下のように設定する。

- ◎ 社会的事象・事実についての問題を見つけだし, それに対して既習事項やこれまでの生活経験から自分なりに予想をしたり, 友だちと交流したりして, 問題を焦点化することのできる子ども。
- ◎ 問題解決の方法や手順など自分の学習計画を具体的に立案し, 問題解決への見通しをもつことのできる子ども。
- 学習計画に基づいて, 資料を取捨選択しながら, 問題を科学的に追究することのできる子ども。
- ◎ 学習したことを活かし, 合理的に意思決定したりこれからの社会のあり方について自分なりの視点から創造したりすることのできる子ども。
- 学習成果を自分なりの表現方法を用い, 工夫してまとめたり発信したりすることのできる子ども。

- 学習の過程で獲得した様々な能力（知識や技能等）を次の学習へつなげたり、実生活に活かしたりすることのできる子ども。

4 「自立に向かう子ども」を育成するための方策

社会科部のテーマに迫るために、次の4点からアプローチを大切にしていきたい。

(1) 教材構成

従来までの学習は、「分かってほしい内容」があり、どう子どもたちが、それを「分かっていくか」というような「理解型」の内容に重点が置かれてきた傾向がある。ここでは、この「理解型」を基本としながらも、子どもたちが主体的に思考したり判断したりすることのできる「思考・判断型」の内容を積極的に取り上げていきたい。そのことを達成するために、社会的事象の理解にとどまるものだけでなく、次のような点に留意し、学習材を開発していく。

- ・ 社会的論争問題を内包し、価値判断を促すような内容の広がりのある素材を取り上げる。
- ・ 「このようになってほしい」「こうあったらいいな」というように、学習したことを発展させ、未来社会のあり方に思いを巡らせることのできるような素材を取り上げる。
- ・ 環境問題、国際化・情報化など社会の変化に対応した新しい内容を含む素材を取り上げる。

(2) 学習過程

自分なりの問題を見つける、計画を立てる、自分なりの考えをもつ、自分なりにまとめるといった子どもたちの主体的な学習の保障という視点から、「めあて追究」の学習を大切にしていく。「めあて追究」の学習は次のようなステップを基本とする。

- ア. 社会的事象に出会い、自分なりの問題を見つける。
- イ. めあて追究の計画を立てる。
- ウ. 計画に沿って個人や集団で追究や吟味をする。
- エ. 追究結果を自分なりの方法で表現し、お互いに学び合う。
- オ. 自分の追究結果を振り返り、自分の考えの変容や追究方法のよさに気づくとともに、新たなめあてを見つける。

これらの学習過程を通して、科学的な社会認識の形成と市民的資質の育成をめざしていきたい。

また、ここでの「めあて」とは、次の3つの「めあて」を基本としている。市民的資質の育成という視点からは、意思決定型、未来志向型の展開を積極的に組み込んでいきたい。

- なぜ？どのように？……………理解型の展開
- どうするべきか？……………意思決定型の展開
- どうしていきたいか？……………未来志向型の展開

(3) 多様な学習活動の取り入れ

実体験や迫体験等、具体的で多様な学習活動を組み込んでいく。

- ・ 子どもたちが実感できるような体験の重視
- ・ 子どもたちが直接対象に働きかけることのできるような調査活動の重視
- ・ 社会参加等、学習したことを活かすことのできる実践的な活動の重視

(4) 学習の評価と支援

学習を展開していく際、子どもたち一人ひとりが何に関心をもったり困ったりしているのかを十分に把握しておく必要がある。子どもたちの学習状況を看取り、子ども個々の状況に応じた支援を行っていく。評価にあたっては、観点別学習状況評価規準を設定し、単元展開の中で焦点化を図りながら、適時評価を行っていく。

5 成果と課題

(1) 教材構成

意思決定力の育成を図るために「思考し、判断する」素材の教材化を試みてきた。議論の質によって大きく次のような型に分けられる。

「社会問題型」の教材

- A：共生の問題 例 4年「環境に優しい包装容器」、5年「宮島の鹿被害の問題」
- B：公共交通機関の問題 例 4年「JR可部線一部廃止問題」（経済性）、
6年「高架道路延伸問題」（利便性と住環境）
- C：開発の問題 例 5年「Y村の開発計画」、「中国山地の熊出没問題」

「未来志向型」の教材

- D：地域の特色を生かした製品化 例 3年「広島市のはたらくひとびとーお菓子づくり」
- E：公有地の有効活用 例 3・4年「グリーンフェスタ跡地」

上記の教材化を通して、次の点が明確になりつつある。

- ・ 社会問題自体に複雑な要素がある場合は、追究自体に無理があり、表面的な議論に終わりがちである。複雑な要素とは、政治的・経済的な要素、多様な価値観が見られる場合などである。
- ・ 身近で、具体的に実感できる社会問題は、状況を把握しやすく、追究も深まりやすい。
- ・ 児童の発達段階を踏まえると中学年では、「AかBか、それともCか」、「どんな解決策が考えられるか」という議論を中心とした教材化が適している。前述の教材では「未来志向」型の教材である。高学年では、「未来志向型」の教材と「社会問題型」の教材を位置づけ「どんな解決策が考えられるか」という内容に「YESかNOか」という内容を加えた教材である。

(2) 学習過程

- ・ 学習過程に意思決定を組み込むことで、児童は意思決定の仕方を学びつつある。
- ・ めあて追究の過程を基本とした。課題設定の段階では「課題の焦点化」が重要である。具体的で切実であるほど子どもの追究が深まっていく。
- ・ 具体的な体験や調査を入れることが重要である。そうすることで子どもたちは、実に生き生きと考え始める。その中で特に、状況や背景の把握、視点を転換、学んだことの発信などを大切にしたい。
- ・ 理解型以上に集団討議の場が大切である。この過程で人の考え方に触れることができ、このことが市民的資質の基礎を培う重要な場となる。
- ・ 現実の問題を取り上げるという点から、学習展開のなかで、自分たちの考えたことを提案していく場を大切にしたい。
- ・ 学習過程の中で、最終決定のところに重点をおいた展開とするのではなく、意思決定を確かにしていくための社会認識の深まりや方策の収集に重点を置く展開の方が子どもたちの力を引き出しやすい。

(3) こどもの姿

- ・ 意思決定していくための方法を身につけて始めている。問題に出会ったらすぐに答えを出そうとするのではなく、現状とその背景を探ろうとする姿勢が見えてきた。
- ・ 解決案を集団で討議する中で、他者の考え方や決定していくことの難しさに気づき始めている。このことは社会性の育成とつながる。
- ・ 今、自分たちの暮らしている社会の中に現実の問題を発見し、それを解決しようとすることに意義を感じ始めている。自分自身が社会参加していこうとする意識が芽生えてきている。